

青年と死

芥川龍之介

青空文庫

×

すべて背景を用いない。宦官^{かんがん}が二人話しながら出て来る。

——今月も生み月になっている妃^{きぎき}が六人いるのですからね。身重^{みおも}になっているのを勘定したら何十人いるかわかりませんよ。

——それは皆、相手がわからないのですか。

——一人もわからないのです。一体妃たちは私たちよりほかに男の足ぶみの出来ない後^こ宮^{うきゆう}にいるのですからそんな事の出来る訣^{わけ}はないのですがね。それでも月々子を生む妃があるのだから驚きます。

——誰か忍んで来る男があるのじゃありませんか。

——私も始めはそう思ったのです。所がいくら番の兵士の数をふやしても、妃たちの子を生むのは止りません。

——妃たちに訊^きいてもわかりませんか。

——それが妙なのです。色々訊いて見ると、忍んで来る男があるにはある。けれども、

それは声ばかりで姿は見えないと云うのです。

——成程なるほど、それは不思議ですな。

——まるで嘘のような話です。しかし何しろこれだけの事がその不思議な忍び男に関する唯一の知識なのですからね、何とかこれから予防策を考えなければなりません。あなたはどう御思いです。

——別にこれと云つて名案ありませんがとにかくその男が来るのは事実なのでしよう。

——それはそうです。

——それじゃあ砂を撒まいて置いたらどうでしょう。その男が空でも飛んで来れば別ですが、歩いて来るのなら足跡はのこる筈ですからね。

——成程、それは妙案ですね。その足跡を印しるしに追いかければきっと捕まるでしょう。

——物は試しですからまあやってみるのですな。

——早速そうしましょう。（二人とも去る）

×

腰こしもと元が大ぜいで砂をまいている。

——さあすつかりまいてしまいましたが。

——まだその隅がのこっているわ。(砂をまく)

——今度は廊下をまきましよう。(皆去る)

×

青年が二人蠟燭ろうそくの灯の下に坐っている。

B あすこへ行くようになってからもう一年になるぜ。

A 早いものさ。一年前までは唯一実在だの最高善だのと云う語に食しょく傷しょうしていたのだから。

B 今じゃあアトマンと云う語さえ忘れかけているぜ。

A 僕もとうに「ウパニシャツドの哲学よ、さようなら」さ。

B あの時はよく生だの死だのと云う事を真面目になって考えたものだったけな。

A なあにあの時は唯考えるような事を云っていただけさ。考える事ならこの頃の方が

どのくらい考えているかわからない。

B そうかな。僕はあれ以来一度も死なんぞと云う事を考えた事はないぜ。

A そうしていられるならそれでもいいさ。

B だがいくら考えても分らない事を考えるのは愚じやあないか。

A しかし御互に死ぬ時があるのだからな。

B まだ一年や二年じやあ死なないね。

A どうだか。

B それは明日にも死ぬかもわからないさ。けれどもそんな事を心配していたら、何一つ面白い事は出来なくなってしまうぜ。

A それは間違っているだろう。死を予想しない快樂ぐらい、無意味なものはないじやあないか。

B 僕は無意味でも何でも死なんぞを予想する必要はないと思うが。

A しかしそれでは好んで欺罔ぎくわうに生きているようなものじやないか。

B それはそうかもしれない。

A それなら何も今のような生活をしなくたってすむぜ。君だつて欺罔を破るためにこう

云う生活をしているのだろう。

B とにかく今の僕にはまるで思索する気がなくなってしまったのだからね、君が何と云ってもこうしているより外に仕方がないよ。

A (気の毒そうに) それならそれでいいさ。

B くだらない議論をしている中に夜がふけたようだ。そろそろ出かけようか。

A うん。

B じゃあその着ると姿の見えなくなるマントルを取ってくれ給え。(Aとつて渡す。Bマントルを着ると姿が消えてしまう。声ばかりがのこる。) さあ、行こう。

A (マントルを着る。同じく消える。声ばかり。)
夜霧が下りているぜ。

×

声ばかりきこえる。暗黒。

A の声 暗いな。

Bの声 もう少しで君のマントルの裾をふむ所だった。

Aの声 ふきあげの音がしているぜ。

Bの声 うん。もう露台の下へ来たのだよ。

×

女が大勢裸ですわったり、立ったり、ねころんだりしている。薄明り。

——まだ今夜は来ないのね。

——もう月もかくれてしまったわ。

——早く来ればいいのにさ。

——もう声がきこえてもいい時分だわね。

——声ばかりなのがもの足りなかった。

——ええ、それでも肌ざわりはするわ。

——はじめは怖こわかったわね。

——私わたしなんか一晩中ふるえていたわ。

— 私もよ。

— そうすると「おふるえでない」って云うのでしよう。

— ええ、ええ。

— なお怖かったわ。

— あの方かたのお産はすんで？

— とうにすんだわ。

— うれしがっていらつしやるでしょうね。

— 可哀いお子さんよ。

— 私も母親になりたいわ。

— おおいやだ、私はちつともそんな気はしないわ。

— そう？

— ええ、いやじゃありませんか。私はただ男に可哀がられるのが好き。

— まあ。

Aの声　今夜はまだ灯ひがついてるね。お前たちの肌かが、青い紗しゃの中でうごいてるのはきれいだよ。

——あらもういらしたの。

——こつちへいらつしやいよ。

——今夜はこつちへいらつしやいましな。

Aの声 お前は金の腕環うでわなんぞはめているね。

——ええ、何故？

Bの声 何でもないので。お前の髪は、素馨そけいのにおいがするじゃないか。

——ええ。

Aの声 お前はまだふるえているね。

——うれしいのだわ。

——こつちへいらつしやいな。

——まだ、そこにいらつしやるの。

Bの声 お前の手は柔らかいね。

——いつでも可哀がつて頂戴な。

——今夜は外よそへいらつちやあいやよ。

——きつとよ。よくつて。

——ああ、ああ。

女の声がだんだん微かすかな呻吟になつてしまいに聞えなくなる。

沈黙。急に大勢の兵卒が槍を持つてどこからか出て来る。兵卒の声。

——ここに足あとがあるぞ。

——ここにもある。

——そら、そこへ逃げた。

——逃がすな。逃がすな。

騷擾。女はみな悲鳴をあげてにげる。兵卒は足跡をたずねて、そこそこを追いまわる。灯が消えて舞台が暗くなる。

×

AとBとマントルを着て出てくる。反対の方向から黒い覆面をした男が来る。うす暗がり。

AとB　そこにいるのは誰だ。

男 お前たちだつて己おれの声をきき忘れはしないだろう。

AとB 誰だ。

男 己は死だ。

AとB 死？

男 そんなに驚くことはない。己は昔もいた。今もいる。これからもいるだろう。事によると「いる」と云えるのは己ばかりかも知れない。

A お前は何の用があつて来たのだ。

男 己の用はいつも一つしかない筈だが。

B その用で来たのか。ああその用で来たのか。

A うんその用で来たのか。己はお前を待っていた。今こそお前の顔が見られるだろう。さあ己の命をとつてくれ。

男 (Bに) お前も己の来るのを待っていたか。

B いや、己はお前なぞ待つてはいない。己は生きたいのだ。どうか己にもう少し生を味わせてくれ。己はまだ若い。己の脈管にはまだ暖い血が流れている。どうか己にもう少し己の生活を楽ませてくれ。

男 お前も己が一度も歎願に動かされた事のないのを知っているだろう。

B (絶望して) どうしても己は死ななければならぬのか。ああどうしても己は死ななければならぬのか。

男 お前は物心がつくくと死んでいたのも同じ事だ。今まで太陽を仰ぐことが出来たのは己の慈悲だと思いがいい。

B それは己ばかりではない。生まれる時に死を負って来るのはすべての人間の運命だ。

男 己はそんな意味でそう云ったのではない。お前は今日まで己を忘れていたろう。己の呼吸を聞かずにいたろう。お前はすべての欺罔ぎもを破ろうとして快樂を求めながら、お前の求めた快樂その物がやはり欺罔にすぎないのを知らなかつた。お前が己を忘れた時、お前の靈魂は飢えていた。飢えた靈魂は常に己を求める。お前は己を避けようとしてかえって己を招いたのだ。

B ああ。

男 己はすべてを亡ぼすものではない。すべてを生むものだ。お前はすべての母なる己を忘れていた。己を忘れるのは生を忘れるのだ。生を忘れた者は亡びなければならぬぞ。

B ああ。(仆れて死ぬ。)

男 (笑う) 莫迦ぼかな奴だ。(Aに) 怖がることはない。もっと此方こつちへ来るがいい。

A 己は待っている。己は怖がるような臆病者ではない。

男 お前は己の顔を見たがつていたな。もう夜もあけるだろう。よく己の顔を見るがいい。

A その顔がお前か？ 己はお前の顔がそんなに美しいとは思わなかった。

男 己はお前の命をとりに来たのではない。

A いや己は待っている。己はお前のほかに何も知らない人間だ。己は命を持っていても仕方ない人間だ。己の命をとってくれ。そして己の苦しみを助けてくれ。

第三の声 莫迦ぼかな事を云うな。よく己の顔をみる。お前の命をたすけたのはお前が己を忘れなかったからだ。しかし己はすべてのお前の行為を是認してはいない。よく己の顔を見る。お前の誤りがわかったか。これからも生きられるかどうかはお前の努力次第だ。

A の声 己にはお前の顔がだんだん若くなってゆくのが見える。

第三の声 (静に) 夜明だ。己と一緒に大きな世界へ来るがいい。

黎明れいめいの光の中に黒い覆面をした男とAとが出て行くのが見える。

×

兵卒が五六人でBの死骸を引ずつて来る。死骸は裸、所々に創きずがある。

——竜樹菩薩に関する俗伝より——

(大正三年八月十四日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：野口英司

1998年3月10日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青年と死

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>